■河川と暮らし・動植物の生息の方向性(環境) 8

地域の人々にとって、憩いやふれあいの場、地域のシンボル的な存在。

災害時には避難地として。

市街化が進む地域にあって、多様な動植物がすむ、身近で貴重な自然環境。

ねがい

生活に潤いを与え、多様な生物の生息・生育環境を守りたい。

■治水の現状（石川の河川改修事業の経緯） 9

寛永10(1633)年　大洪水(※)　死者136名、田地2万石被害
明和元(1764)年　大洪水(※)　堤防決壊（詳細不明）

明治36(1903)年7月　洪水（豪雨）　（被害詳細不明）
→既往最大洪水
昭和28(1953)年9月　洪水（台風13号）　（被害詳細不明）
昭和31(1956)年9月　洪水（台風15号）　（被害詳細不明）

昭和37(1961)年　石川築堤工事着手

昭和40(1965)年9月　洪水（台風24号）　（被害詳細不明）

昭和48(1973)年　石川低水路工事着手
昭和57(1982)年　滝畑ダム完成

昭和57(1982)年8月　洪水（台風9･10号）　床下浸水105戸、床上浸水55戸
→戦後最大洪水
平成　7(1995)年7月　洪水（梅雨）　床下浸水45戸、床上浸水1戸
平成　8(1996)年　石川高水敷整備着手
平成11(1999)年8月　洪水（豪雨）　床下浸水12戸、床上浸水5戸

※雨量観測記録が存在するのは明治30年以降。大洪水の参考として記載。

河道状況の変化

S37：石川築堤工事着手
S48：低水路工事着手

洪水を安全に流下させるため、堤防を築き、川の流れる低水路を整備！
現在の石川は、10年に1度の大雨により発生する洪水が安全に流下する河道が確保されています。

“既往最大洪水”とは・・・
雨量観測史上最大の雨量による洪水

“戦後最大洪水”とは・・・
戦後最大の雨量による洪水

S57
滝畑ダム完成

滝畑ダムの役割
・農地防災
・水道用水
・かんがい用水

■治水の現状（過去の洪水のようす）

10

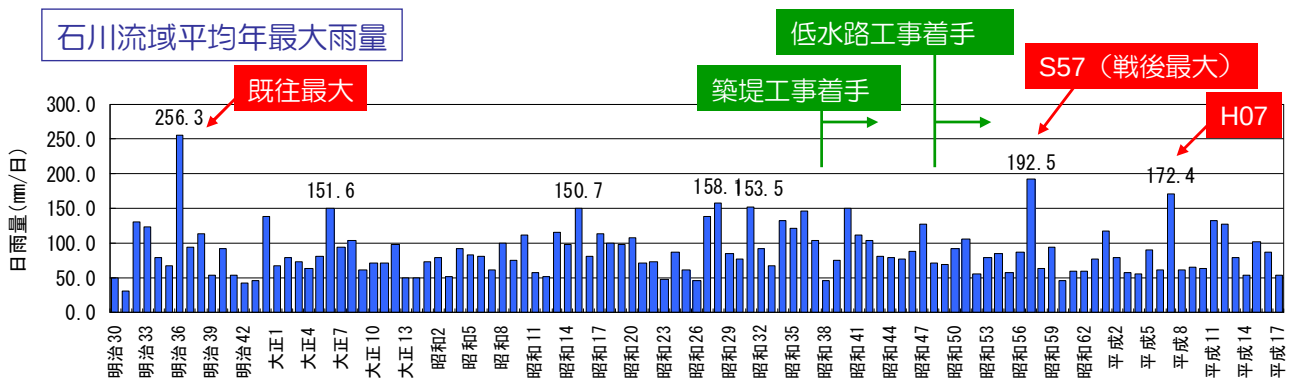
水害発生当時

S57

石川の堤防は決壊しませんでしたが、
護岸が削られました。
支川では、浸水被害が発生しました。

H07

支川では護岸が削られ、浸水被害も
発生しました。



■大阪府の治水に対する考え方

11

洪水を知る！

洪水は、いつ起こるかわからない、日常にはない現象です。
しかし、データを蓄積し、統計的な解析をすることで、”○年に一度程度発生する規模”として、同程度の頻度で発生する洪水の規模を科学的に把握することができます。

大阪府では

目標を立てる！

将来目標としては、*一生に一度経験するような大雨（概ね100年に一度発生する程度）が降った場合でも、川があふれて、人が亡くなることをなくすことを目指します。*
当面は、将来目標に向けて、*府内全域で早期に治水安全度を底上げするため、*概ね１０年に一度の大雨(おおむね50mm/h)により発生する洪水が安全に流れるよう河川整備を進めます。

河川整備計画

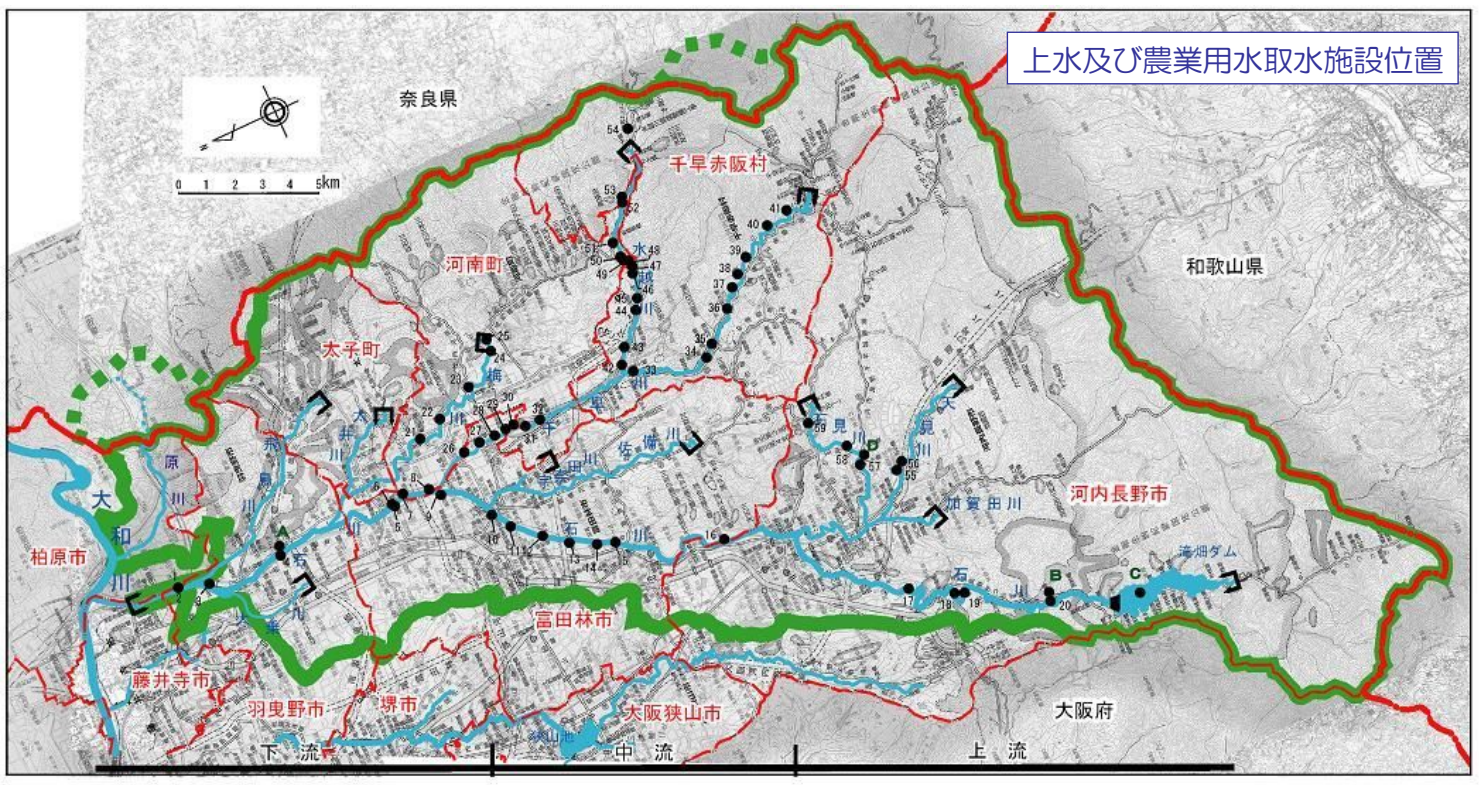
■石川ブロックの河川整備の現状

12

石川本川では10年に1度の大雨に対応できる断面を確保しています。支川の原川・大乗川は河道整備は概成しています。

他の支川については、府内他河川に比べ整備の進捗率が低く、10年に一度の大雨に対応するため河川整備を順次進めていく必要があります。

■水利用の現状

13

- ●石川流域では古来より多くの水利用がなされています。
- ●川から水を取込む井堰が連続する区間では、渇水時に水量が乏しくなる場合があります。
- ●市街化の進展に伴い農地が減少しています。より適正な水利用のあり方を考えていく必要があります。